水晶のピラミッド

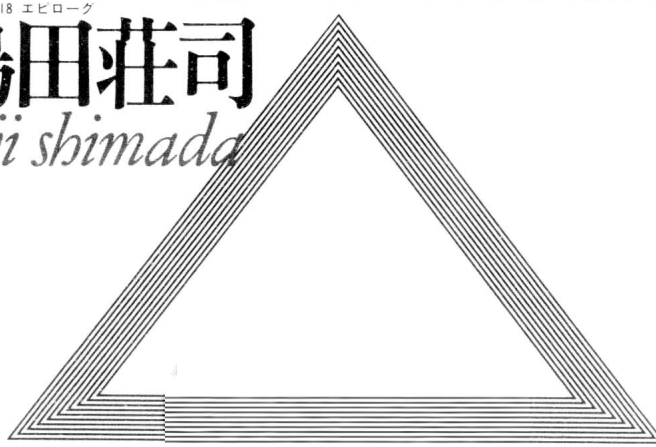
ビッチ・ポイント、アメリカ1 エンプト島、アメリカ2 オーストラリア マーテュ、エジプト1 船上1 マーテュ、エジプト
ナイル、エジプト3 船上3 ギザ、エジプト4 船上4 ギザ、エジプト5 船上5 ライオン岩、エジプト6 船上6 ジッグラト、
7 船上7 エンプト島 アメリカ3 ニューオリンズ、アメリカ4 エンプト島、アメリカ5 エンプト島、アメリカ6 エンプト
リカ7 塔、アメリカ8 塔、アメリカ9 ピラミッド、アメリカ10 ハリウット、アメリカ11 ロサンゼルス、アメリカ12 横
断上 車中 エンプト8 ギザ、エンプト9 カイロ、エンプト10 ナイル、エンプト11 ビッチ・ポイント、アメリカ13 エン
アメリカ14 ハリウ ト アメリカ15 鳥車道、日本2 ハリウッド、アメリカ16 ロサンゼルス アメリカ17 ビヴァリー
アメリカ18 エピローグ

島田荘司
sōji shimada

ビッチ・ポイント、アメリカ1 エジプト島、アメリカ2 オーストラリア マーデュ、エジプト1 船上1 マーテュ、エジプト2 船上2 ナイル、エジプト3 船上3 ギザ、エジプト4 船上4 ギザ、エジプト5 船上5 ライオン岩、エジプト6 船上6 ジックラト、エジプト7 船上7 エジプト島、アメリカ3 ニューオリンズ、アメリカ4 エジプト島、アメリカ5 エジプト島、アメリカ6 エジプト島、アメリカ7 塔、アメリカ8 塔、アメリカ9 ピラミッド、アメリカ10 ハリウッド、アメリカ11 ロサンゼルス、アメリカ12 横浜、日本1 機上 車中、エジプト8 ギザ、エジプト9 カイロ、エジプト10 ナイル、エジプト11 ビッチ・ポイント、アメリカ13 エジプト島、アメリカ14 ハリウッド、アメリカ15 馬車道、日本2 ハリウッド、アメリカ16 ロサンゼルス、アメリカ17 ヒヴァリーヒルズ、アメリカ18 エピローグ

島田荘司

sōji shimada



講談社

水晶のピラミッド

1991年9月25日　第1刷発行
1992年3月19日　第4刷発行
著　者・島田荘司
発行者・野間佐和子
発行所・株式会社講談社
東京都文京区音羽2-12-21(〒112)
電話(03)5395-3505(編集部)
(03)5395-3622(販売部)
(03)5395-3615(製作部)
印刷所・豊国印刷株式会社
製本所・黒柳製本株式会社
定　価・2000円(本体1942円)

© Sōji Shimada 1991 Printed in Japan
落丁本・乱丁本は小社書籍製作部宛にお送りください。送料小社負担にてお取り替えいたします。なお，この本についてのお問い合わせは文芸局文芸図書第二出版部宛にお願いいたします。

ISBN4-06-205539-2（文2）

水晶のピラミッド

目次

エジプト島、アメリカ7・・・・・・・・・・・・・・・・240
塔、アメリカ8・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・256
塔、アメリカ9・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・270
ピラミッド、アメリカ10・・・・・・・・・・・・・・・・304
ハリウッド、アメリカ11・・・・・・・・・・・・・・・・316
ロサンゼルス、アメリカ12・・・・・・・・・・・・・・・327
横浜、日本1・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・333
機上・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・353
車中、エジプト8・・・・・・・・・・・・・・・・・・・375
ギザ、エジプト9・・・・・・・・・・・・・・・・・・・391
カイロ、エジプト10・・・・・・・・・・・・・・・・・・411
ナイル、エジプト11・・・・・・・・・・・・・・・・・・418
ビッチ・ポイント、アメリカ13・・・・・・・・・・・・・424
エジプト島、アメリカ14・・・・・・・・・・・・・・・・438
ハリウッド、アメリカ15・・・・・・・・・・・・・・・・495
馬車道、日本2・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・539
ハリウッド、アメリカ16・・・・・・・・・・・・・・・・545
ロサンゼルス、アメリカ17・・・・・・・・・・・・・・・556
ビヴァリーヒルズ、アメリカ18・・・・・・・・・・・・・575
エピローグ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・605

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

ビッチ・ポイント、アメリカ1・・・・・・・・・・・・007
エジプト島、アメリカ2・・・・・・・・・・・・・・・014
オーストラリア・・・・・・・・・・・・・・・・・・・017
マーデュ、エジプト1・・・・・・・・・・・・・・・・018
船上1・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・030
マーデュ、エジプト2・・・・・・・・・・・・・・・・038
船上2・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・045
ナイル、エジプト3・・・・・・・・・・・・・・・・・059
船上3・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・070
ギザ、エジプト4・・・・・・・・・・・・・・・・・・084
船上4・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・112
ギザ、エジプト5・・・・・・・・・・・・・・・・・・121
船上5・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・135
ライオン岩、エジプト6・・・・・・・・・・・・・・・145
船上6・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・154
ジッグラト、エジプト7・・・・・・・・・・・・・・・161
船上7・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・167
エジプト島、アメリカ3・・・・・・・・・・・・・・・172
ニューオリンズ、アメリカ4・・・・・・・・・・・・・191
エジプト島、アメリカ5・・・・・・・・・・・・・・・209
エジプト島、アメリカ6・・・・・・・・・・・・・・・226

装丁・菊地信義
装画・倉科昌高
本文
図版・橋田幸雄

水晶のピラミッド

1 ビッチ・ポイント、アメリカ

道が海に近づくにつれて、雲行きが怪しくなってきた。もうすぐ陽が暮れる時間帯ではあったが、キャディラック・フリートウッド・エレガンスの窓の外は、薄闇に包まれたように、どんよりと暗くなった。

「きっとひと雨くるぜ」

ハンドルを握るビルがそうつぶやいたとたん、広いフロントウインドゥを大粒の雨が叩きはじめた。みるみる勢いが増していく。

「いやっほう！」

ワイパーのスウイッチを入れながら、ビルが叫んだ。

「雨に唄えばパーティでもやろうぜ！（レッツ・ハヴ・ア・シンギング・イン・ザ・レイン・パーティ）」

窓を閉めろよジュディ、雨が入る！」

そして大声で歌を歌いはじめた。助手席のジュディも参加した。

「暑いわ」

ジュディが叫ぶように言った。外で雨のしぶく音があまりに大きいので、大声を出さないと会話にならないのだ。

「ああ蒸してきやがったからな、まるっきりサウナだぜ。でも表で雨に濡れるよりはマシだろ？」

「エアコン入れてよ」

「悪いなジュディ、この車エアコンが故障してるんだよ。だからケチの親爺（おやじ）が俺に貸してくれたんだ。ビル、三日以内にエアコン直しとけってね」

きゃっ、とジュディが悲鳴をあげた。少し窓を開けたら、雨粒が勢いよく飛び込んできたのだ。

「ああ濡れちゃったわ」
「親爺御自慢の革張りのシートだけは、濡らさないでくれよなジュディ」
「雨で濡れなくても、もうじき私たちの汗でたっぷり濡れるわよ。ねえビル、いつまでこんなオーブンの中にいるつもり。どこかに入って休みましょうよ」
「今日は金曜の夜だぜジュディ、ニューオリンズ中のモーテルはぎっしり満員さ」
「モーテルならアメリカ中が満員御礼よ」
「ああ、みんなほかにやることも思いつかないしな。真面目に働いたって日本人にゃ勝てないし。せいぜいベッドで憂さを晴らしてるんだろ」
「いいこと思いついたわビル、私たちはもっと別のパーティをしましょ」
「どんなパーティだい、また太った君のママと、ブリッジなんてごめんだぜ」
「もっと気が晴れるパーティよ、その先を左へ曲がって。海岸べりの岩場へ出るはずよ」
「おいおい、この雨の中、海べりへ出て何をする気だい」
「暑くないの？　私は下着までぐっしょりよ。ひと気のない岩場があるの。もうすぐ陽も暮れるし、メキシコ湾でひと泳ぎしましょう」
ビルはハンドルを握りながらしばらく目を丸くしていたが、
「そうだな、どうせ雨に濡れたついでだ。それならいっそ泳いじまうか」
と言った。
「でも水着はあるのかい？」
「そんなものいらないわよ」
ジュディがはしゃぐように言った。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

「泳ぎたがっているのは私たち。私たちの水着じゃないわ！」

岩場をぬって海べりまで降りていく狭い道を、ビルは注意しながら下っていった。海面がようやく間近に見えるあたりに達し、キャディラックが一台入りそうな草地を見つけ、後部から苦労して入れた。なにしろ土砂降りの雨と、陽が落ちかかっているせいで、少しも視界がきかないのだ。

車を停め、エンジンを切ると、二人はもうこれ以上、一秒だって車の中にはいられない気分になった。両方のドアから、歓声をあげながら雨の中にとび出した。ドアをロックするのももどかしく、二人は大声をあげながら岩場の間の小道を、メキシコ湾の冷たい水に向かって駈け下っていく。ビルのアロハシャツ、ジュディのTシャツが、激しい雨でみるみる肌に貼りつき、膝の上でカットしたお揃いのブルージーンズも、じっとりと重くなる。

大きな岩場の上から、雨が叩く砂の上に飛び降りる。まずジュディ、続いてビル。そこはもう、波打ちぎわなのだった。雨の匂い、そして潮の匂いがした。

「ほらビル、こっち！」

ジュディが叫び、先を駈けていく。上空にひさしのように張り出した岩の下に走り込んで、そこだけはまだ乾いている砂の上に勢いよく尻餅をついた。

「ね？　ビル、ここ素敵でしょ？　あっちも、あっちも、壁みたいに岩が張り出していて、ここだけ、ちっちゃなプライベートビーチみたいでしょう?!」

言いながら、ジュディはTシャツを脱いで絞り、これで顔や髪を手荒に拭いた。ビルもアロハシャツを脱いで、同じようにした。ジュディの若い乳房が現われたはずだが、暗いせいでよく見えなかった。二人は急いで抱き合い、キスをした。

「確かにいいとこだなジュディ、こんなことするにはおあつらえ向きだぜ。でも誰と来た？」

ビルが言った。
「妬かないでビル、正直に言うから」
恋人の腕の中でジュディが言う。
「頭文字はB・T」
「B・T？　ハイスクールの男か？　それともオフィスの同僚か？」
「放して、ちょっと泳ぐ」
もがきながらジュディは言う。
「応えてからだジュディ」
しかし彼女は恋人の腕から脱出し、雨の中をメキシコ湾に向かって駈け出す。ちょっと立ち停まり、ジーンズと下着を脱いで、ビルの方へ放った。
「ベッツィ・トンプソン、ガールスカウトのお仲間よ！」
そう叫んで、メキシコ湾の中に飛び込んでいった。ビルも急いで服を脱ぎ、乾いた砂の上に置いてから、恋人に続いた。
土砂降りの雨の中を、二人して三十分も泳いでいた。あれほど熱かった体が、そうしていると震えるほどに冷えてきた。すっかり陽が落ちたせいだ。
雨は小降りになってはきたが、上空の雲は相変わらず厚いので、星の光はない。国道からも大きくはずれているので、車の明りもほとんど届いてはこない。遥か彼方のニューオリンズの街明りが空の裾に滲んでいるので、この薄明りで、あたりがぼんやりと見えるばかりだ。
「ああ、なんだか寒くなってきた」
ジュディが、また叫ぶように言った。

「もうあがるわ、体を乾かしましょう」

そしてところどころに岩場が混じる足場に注意しながら、ゆっくりと水からあがっていった。裸だったが、これを眺めている人物は、恋人が一人だけのはずだった。暗い足もとをじっと見つめながら歩き、自分の膝小僧が水面上に出てきたので、ジュディは顔をあげた。恋人はまだ背後の暗い水の中にいた。

最初は黒い岩かと思った。微動もする様子がなかったからだ。しかしそれにしてはずいぶんぼっそりとしているし、なにより人の視線だけが持つ、あの不安をかきたてるような独特のプレッシャーを感じた。彼女の歩の運びが、本能の命ずるままに徐々にゆるやかになり、そしてとうとうジュディは、激しい悲鳴をあげた。

水面に突き出した、黒い尖った岩と思えたものが、わずかに動いたからだ。やはり人間！

しかし同時にそれは、どうしても人間とは思えないのだった。いつまで時間が経っても、その黒い物体は人間と認知することができないのだった。その顔、とおぼしきあたりが、遠いニューオリンズの街明りの方に向いた。

それは人間の顔ではないのだった。肌の色は人間のもののように白かったのだが、頭頂部には少しも毛髪がなく、額から後頭部に向けて、深い陥没が一筋走っていた。

そして狭い額。その陥没のすぐ下に両眼らしき暗い窪みがあった。両眼はあくまで大きく、丸く、もっともそれが事実目であるとするならだが、かっと見開いてジュディの体を見据えているようだった。

鼻は、一般的な意味では存在しなかった。鼻梁はなく、顔の下半分が狼のように大きく前方にせり出し、暗い大きな穴が、鼻とおぼしきあたりに黒く開いていた。

鼻の下に、口らしきものもあった。しかしこれこそが、人間のものと大きく異なっている。薄い唇の亀裂は、まるで深い傷口のように頬いっぱいを走り、そうして耳の手前で停まっていた。しかし、人間のものと似た耳はそこには存在せず、大火傷で溶けてしまったような耳に似た肉の隆起がわずかに肌にへばりついているばかりで、そのかわりに犬のような大きな耳が、ぴんと頭の上の方まで立っていた。

その様子は、耳を別にすれば、白い肌をした鰐に似ていた。直立した鰐だ。

頭部の下には太い首があり、白い、人間のものとよく似た体に続いていた。その体は男のものらしく、胸も、肩もあったが、体一面に、ちょうど濡れた海藻がこびりつくように、びっしりと生えた黒い体毛が、雨と海水に濡れているらしかった。

そんな怪物がそぼ降る雨の海に立ちつくし、ジュディの裸身にじっと見入っている。

ジュディは悲鳴をあげ続けた。

沖でばしゃばしゃと水音がして、ビルが大急ぎで泳ぎ戻ってくる気配だった。

「ジュディ、どうしたんだ」

戻りながら大声をあげた。

怪物がぴくりと動いた。背を丸めた。それからまた伸びあがり、耳もとまで裂けた口をぱっくりと開いて、歯車がきしるような声を低く洩らした。のこぎりのように白い歯が、ずらりと並んでいるのが見えた。ジュディの全身が、あらためて総毛立った。

怪物はばしゃんと水音をたて、海中に身を躍らせた。その背中に、黒い背びれに似たものがあるのを、ジュディは目にとめた。

怪物はめざましい勢いで泳ぎはじめ、しばらくは海面にその動きが見えていたが、海中深くに潜っ

たとみえて、やがて水面は静かになった。気配が消えた。
あたりには、小雨が穏やかに叩き続ける静かな海面だけが残り、たった今ジュディが見たものを、ただの怖ろしい幻覚だったかと疑わせた。
その静けさを、ビルの両足がたてる水音が破った。
「どうしたんだ？　ジュディ」
何と説明してよいか解らず、彼女は立ちつくした。誰より、彼女自身が信じられないのだ。
気づくと、もう彼女は悲鳴をあげてはいないのだった。ただ全身が、猛烈な寒さに襲われたように震えていた。実際、ひどい寒気がした。おこりがついたように体の震えは停まらない。涙が、あとからあとから流れるのだった。

2 エジプト島、アメリカ

それから四日後の一九八六年八月十五日夜、メキシコ湾に向かって大きく突き出したビッチ・ポイントという岬で、一人の名のあるアメリカ人の死体が発見された。

現場は、ビッチ・ポイントの鼻先にぽつんと浮かぶ、岩の島だった。

周囲をメキシコ湾の荒い波が絶えず洗う、直径五百メートルほどのこの小さな島には、地上三十数メートルの、奇妙な石積みの塔が建っていた。この建造物の最上階、七階で、全米有数の財閥の一人といわれる人物が、死体となって発見されたのである。

八月十六日の未明、連絡を受けて駈けつけたニューオリンズ警察署のデクスター・ゴードンと、FBIのネルソン・マクファーレンは、死者を見降ろした時、驚きの声を抑えきれなかった。

死者は、上体を奇妙な具合にそらせ、右手を前方に、左手を後方に伸ばし、今まさにクロールで水を掻いているところのように、双方を微妙に彎曲させていた。

奇怪なのはその目だった。両眼がこぼれ落ちるほどに双眸は見開かれ、血管を浮かびあがらせた白眼部を大きく露出したまま、眼球をしなびさせていた。その様子は、自分の身に起った信じがたい出来事に驚愕の目を見開いたまま、その恐怖を永遠に、表情に凍りつかせてしまったものとしか考えられない。

死因は、なんと溺死だった。それも、四十フィート眼下の海水を内臓いっぱいに飲まされ、絶命していたのである。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c